

ス - ハ - 林道 今や之の 小道 と おはなと オロ

たしか 昭和37年、この年の7月上旬だったか、梅雨が明けて間もない白山は カラリとした好天の 爽やかな夏に突入したようだ。久し振りの単独行で、身が軽い。

スタートが わりと涼しくて快適だったが、途中から長い々 岩間新道を 一気に駆けおりてきた。まだ体調に自信はあつたけれど、サスガにいささかバテ気味で サテ その日は岩間温泉に一泊することにした。

地元の人も交えて 浴客は4、5人、それにまじってノンビリと山の汗を流せる気分は最高、太さ5センチぐらいの丸太を渡した 古びた木の浴槽、昼でも薄暗くてランプを灯もして 心の底から 解きほぐしてくれる風情が ヒッソリと漂っている。

熊の肉と山菜と わづかの地酒と谷川の音に 淡然とした一夜を過ごすことができた。噴泉塔のある河原からわきでる露天風呂も、今回は 豪雨により岩間ヒュッテが破壊されているということを 割愛する。

次の朝、そのまま下りるのはもつたいたくなくして、ここから続いて上流の蛇谷（まだ スーパー林道のできていない）を時間の可能なところまでつめてみたいと思いつた。玄関で足捨えをしていると、昨夜 頬見知りになつた一人の老人が、「私も一緒させてくれ」とのことだ、なんとなく話が合つて同行することにした。

蛇谷は 岩間温泉を一度くだつて尾添川に合流し、中宮温泉からの湯谷分岐から遡つていよいよ大きな河原をぐんぐん 上流へ上ることから始まる。

山なれた人だろうから さして準備もいらないと思ったけれど、アツというまもなく先に立つてサッサと谷間へ向けて歩き始めたには驚いた。

なんと、道などある筈も無い、ゴロゴロした河原の石の上を ヒヨイヒヨイ跳ねるようにして 遅つて行くその後を、フウフウ言いながら ついて行くのがヤツトなのだ。その頃は 地下足袋だったが踏み外せば 深くてもジャボンと水中へ踏み込むはずなのに 老人は一步も足を濡らさず進んで時折立ち止まり、ニコニコと温容に私を待つてくれれる。

高曇りながら好天。鉄砲水の来る雨の心配はまず無い。まことに絶好の遡行日和。

ところが思わぬ伏兵が群がつていた。

無数に飛び交う“オロ”の大群だ。“オロ”はふつう アブ（或いは大型のブユ）。夏の河原には大量に生息していて、哺乳類の血を狙つて飛んでくる。われわれは絶好の餌となつてゐるわけだ。それで群がつて来襲するこの“オロ”に 敢然と立ち向かわねばならない。

とはいっても、私の方は おぼつかない足元と“オロ”とで、まさにオロオロしながらの歩行である。

ところが、さらに驚いたことに、途中で手折ったカエデの一枝を持った老人は、それを左右にハッシンハッシンと打ちながら、肌に群がる“オロ”をはたき落として前進していくのだ。私はと言うと、このオロたちにビンビン刺され、まことに「泣き面にハチならぬ、泣き面に“オロ”」（後で數えたら百箇所ぐらい腫れていた。）の態であった。

「もうすぐ親谷、右の尾根の霧晴峠を越えてその向こうの岩間の噴泉塔のある中川からでも、この親谷の湯へ入りに来れるし、この谷をズーッと遡れば瓢箪（フクベ）谷を抜けて、三方岩岳と野谷荘司山の鞍部へ取り付くとスグ向こうが岐阜県、朝になれば萩町の二ワトリの声が聞こえるゾ。」と、何度もこの辺りを歩き慣れたように言われる。

川波の瀬音に合わせて、そよかぜにゆすらぐ木々の葉音にチチッとたわむれている小鳥のさえずりとは、まさに夢幻の境地！“オロ”をもその絵の一役に取り込んでいるような駄蕩とした気分に浸ってみる。たつたふたりだけでこの素晴らしい自然を満喫できる、豊かさで、これから厳しいだろう沢づめにも、さほどの緊迫感はない。

「あんたもおもしろいお人だね。こんな山中を、なんで登ってみようと思ひなさる。どこから来なさったかね」と、こちらが問いたい言葉をノンビリとかけられて、サテといつて特別の意味もない、気まぐれの山旅ですよ。と答えて名を名乗つたら、なんと、老人の方は、アノ鶴来町の旧家、小堀酒造家の前当主・小堀定信さん。呑んべえには堪えられない“銘酒”万才樂のご本家だったのだ。

そして、後日わかったことだが、金沢一鶴来一白山下を繋ぐ、金名線を敷設された、偉大な企業家だということ。

とすれば、相当なご高齢（75才ぐらいか？）だろうが、小柄なこの軽快な身のこなしに、まったく感心してしまった。

相変わらずの小堀さんの歩きに、少しあつて行けるようになつた頃、朝の出発の遅れがあつて、12時近くになって親谷との分岐点に到着。かつての5万分の1の地図ではここに蛇谷莊（じゃだにそう）という小屋が記されている。

向かい合つた左岸の親谷から、後に名所になつた姥ヶ滝（うばがたき）が、大きく髪を振り乱した姿で、すさまじく落ちている。

そして親谷の湯とよばれている、河原に石で囲んだだけのぬるめた熱湯の浴槽のへりには、數匹の蛇の脱皮した抜け殻が横たわっていた。まさに、ここは人間にも蛇にも憩いの場所、蛇谷の名前の所以といえて、仄かな懷かしさを感じられる。

昨夜の宿から貰つたニギリメシをほうぱりながら、トツトツとした小堀さんの話し振りに、しばし聞き惚れる。

今日の彼の同行の目的は、今企画している大事業の下見だということである。

彼の企画は、尾添から中宮をへてふくべ山の山腹を縫い、三方岩岳をこえて岐阜県までの林道（後のスーパー林道）を設定しようという大理想だと、淡々と語られる。

のために、この谷を調査して 平行したコースの探索をしたい時に、ちょうど同行者としての私の出現が ベストタイミングだったようだ。

私はといえば、その頃はそれ程の大事業の実現は、素晴らしい夢物語に聞え、自分がタダの山好き・沢登りやだったことに、まったく恥じ入ってしまった。

蛇谷の奥へ邇行して分岐する右の谷がオモ谷。左の、ふくべ山の下を深く削って入っているふくべ谷へ 時間の許す範囲で覗いてみることにする。

徐々に左右の岸壁が狭まってきて廊下状の陰惨とした谷になつてくると、さすがの小堀さんもやはりこれは手強い相手のようだ。空は高く、雨の心配はないが、巨岩を噛んで流れる水勢はますますはげしく相当に時間がかかるようで帰りのことも考えて、さきに通ったきた分岐点から約一時間の所でバックしようと決定。“ふくべ谷の右岸中腹に林道が考えられそう”という目算を終え、ふくべの大滝の手前で切り上げることにする。

まだ深い谷の奥は 流域には飛騨变成岩や濃飛酸性岩が露出し 秋の紅葉はみごとで、多くの滝に身も竦む（スクむ）ほどだ という事である。

帰りも相当労力がかかったけれど、再び明るい河原の親谷の湯へは3時頃に帰着。やはりホット安堵！～親谷の湯は、秘境“ドスの湯”ともいわれ、藩政時代には飛騨側から三方岩岳を越えてふくべ山の尾根道を辿り 湯治に通う小道が有つたそなう。

ここからの帰り、不思議なことに あのいまわしい オロ の姿はまったく消えて、すさましかった猛襲が ウソ のような気分の中を 快適なペースで中宮温泉に到着。

その晩はゆっくりされるという小堀さんを中宮温泉に残して、夏休みとはいえ 進学の補習授業の準備もあって、不思議な出会いと 本当に胸膨らむ楽しい谷歩きをさせて頂いたことの奇遇のお礼をのべ、別れを惜しみつゝ帰路についた。

その後、数年して新聞紙上に 小堀さんの訃報を発見して あのお元気だった方がと、愕然とした。

そして、その2・3年後、スーパー林道の工事が 本格的に始まった。

恐らく亡くなられる寸前まで この大事業に精魂を尽くされたことは間違いないと思う。

別れ際に頂いた、精密な手書きの名刺は、40数年経た今も 大切に保管しており、あのオロの思い出とともに、河原でのカクシャクとしたお姿がいつまでも目の奥に残つて爽やかに焼きついて、離れないでいるのだ。

注：オロ の出現には不思議な時間帯があるらしい。

H 16.7.5

三井 記

オロ は山中の河原に群居し、最初の発見は CO_2 に誘引され、体温 37°C とし、血をなめらか、ヒジでは、イヨシロオビアブ^ハが多いため、リバウド 10 km の谷で 400 台以上が生息している地域があつた。

三井の経験で 後日 ハケ岳の沢みをした折にも、オロ群に遭遇して、セラスラ沙汰なしとも すうかしいと いふのである。